



図書館情報大学



附属図書館報



Vol. 18 No. 3/4 2002

最終号

特集：図書館情報学の新たな方向

目 次

図書館情報学の新たな方向（植松貞夫）	2
メディア・スタディーズとしての公共図書館研究（吉田右子）	3
臨床の学としての図書館情報学（鈴木正紀）	4
司書課程と図書館情報学（田中岳文）	5
変革を生き抜くために（藤井敦）	6
既知の情報・新しい情報（金藤伴成）	7
図書館情報学と哲学（横山幹子）	8
図書館情報学の対象としての「情報」と「メディア」 （緑川信之）	9
図書館情報学のソリューション（岩澤まり子）	10
音楽認知と音楽情報検索（平賀譲）	11
図書館情報学の新たな方向（綿坂豊昭）	12
図書館情報学の新たな方向 — 理学研究者からの視点 — （中山伸一）	13
総目次	14
附属図書館日誌	20
編集後記	20



図書館情報学の新たな方向*

植 松 貞 夫**

知識は情報を選択・収集し、分析、加工・蓄積し、評価することを通じて日常的に創成される。古今東西の人類が生み出した知識をこのプロセスによって利用することで、そこから新たな知識が創成され社会の進展が可能となる。図書館情報学は、知識そのものの理解にたつて、知識創成サイクルの社会的・技術的基盤をシステムとして追究する学問である。簡単にいえば、図書館情報学は、Aという人からBという人への知識や情報の伝達が、効率的かつ効果的になされることに関する、およそあらゆる事柄について考究する学問ということができる。AとBとは時間と距離を超越している。百年前にAが書いた書物が図書館に蓄積され、現代に生きるBがそれを利用する、現代の図書が未来の読者に、米国人の書いたものが日本人になどである。

図書館情報学の研究教育の領域としては、Aが他人に伝達する目的で自己の知識をどのように表現するかから始まり、それが図書という形をとるのであれば、出版とその流通、それが収集・蓄積される図書館の管理や運営、サービスや保存のあり方、電子的に表記されるなら、ネットワークや情報センターを介しての伝送、蓄積、処理、加工など、そしてBが最もふさわしいものを見つけ出すことに関連する検索や評価、最終的にそれをどう認知し理解するかなど、知識や情報の一連の伝達プロセスの各時点での現象に関わることがまず挙げられる。また、こうした伝達にかかる法・制度についてや、学術情報の流通に関して学問分野ごとに効率化のための固有の課題についても扱われている。

さらに、伝達が効果的かつ効率的に行われることを仲介する職業人としての図書館司書や情報提供サービス職員の養成のあり方、利用者に対する利用方法の教育のあり方も主要な課題とされている。

このような学問の特質から、図書館情報学はさまざまな学問分野を背景とする研究者が、理論と応用、知識と技術の調和を意識しながら、それぞれのテーマに取り組んでいることが大きな特徴である。また、情報学としてくくられる中で、図書館学にルーツの一端をおく図書館情報学が他から際立つ相違点は、AからBへの知識伝達の媒体であるコンテンツ及びその集積を重視することである。提供しようという情報の中身、構築しようとするシステムが処理すべき情報の中身に関する知識を重視する図書館情報学は、これからの知識社会にあつて極めて重要な学問領域といえる。

本学の発足以来20有余年の間に、コンピュータとコミュニケーション技術の進歩に支えられて、社会の情報化は著しい速さで進行し、図書館情報学が主要な対象とする図書館と情報をめぐる環境は急激に変化した。それに対応して、またそれを先導する形で、領域の拡大と質的な深化を図ってきた。具体的には、「情報革命」とも呼ばれる社会、経済、文化、システムが大きく変化する時期にあつて、図書館情報学の研究と教育は、関連する周辺領域へと拡大し、その重点は、諸学問の基盤的要件になりつつある情報学に関わる知識・技術と、知識と情報の表現記号であり媒体としての情報メディアとに大きくシフトし、人間の知的創造活動の基盤となるソフトインフラ全体について、学際的かつ総合的に考究する学問へと飛躍してきた。

今後、AからBへの伝達の表現記号がいかにマルチメディアの形態をとろうとも、そして伝達経路がいかに多様化しようとも、コンテンツを重視し、その理解から発想して、どうすれば知識の共有化や再生産が効率的かつ効果的に行われるかについて考究する図書館情報学の特質を、さらに高度化・精緻化していくことが大切であると考えている。

* The Future of Library and Information Science by Uematsu-Sadao

**本学副学長、附属図書館長

メディア・スタディーズとしての公共図書館研究*

吉田 右子**

公共図書館研究にはメディアの急速な発展を背景とする実践の広がりに対し、理論的基盤を与えることが求められている。公共図書館研究をリードしてきたアメリカでは、図書館実践と図書館研究が緊張関係のなかからお互いに影響を与えつつ、公共図書館のありかたを探ってきた。そしてアメリカ公共図書館が20世紀半ばまでに、コミュニティのメディア・センターとして機能するようになった時点で、堅実な資料提供と良質なメディアサービスを中核とする公共図書館サービスの理念が明確に提示された。

20世紀前半期の公共図書館論は、現在の公共図書館存立の理念的基盤となった点で評価される。しかしながらそこには大きな課題が残されている。メディアによる市民生活の向上を基調とするアメリカの初期コミュニケーション論の楽観的な認識—自由主義的コミュニケーション論—を図書館研究が取り入れることによって、図書館実践は脱政治化された文脈で分析されてきたからである。1970年代にマイケル・H. ハリスによって、公共図書館という場所における文化的ヘゲモニーの様態が明らかにされたものの、図書館実践に対する批判的研究は必ずしも積極的に行なわれてきたとはいえない。

今後の公共図書館研究は、図書館実践のあらゆる側面に含まれる文化的差異や図書館に作動する権力構造を研究対象として真正面から受け止め、それらを実証的に検証していくものでなければならない。そのための1つの手がかりは、文化の政治性を研究課題の最前に掲げるカルチュラル・スタディーズの方法論に見出すことができる。

とりわけメディアとコミュニケーションの批判的分析はカルチュラル・スタディーズの中心的論点であり、近年はメディア・スタディーズと呼ばれる領

域を形成している。一世紀以上にわたりコミュニティにおけるメディア・コミュニケーションの結節点として機能してきたアメリカ公共図書館に生起する論点は、そのまま現在のメディア・スタディーズの中心的課題へと接合されるのである。

フランクフルト学派の批判理論を源流に持つメディア・スタディーズには批判的まなざしが貫かれているとはいえ、それが文化と人間のかかわりの多様性を描き出していく手法であることに着目したい。文化の実践に対して複数の視座を確保し、しかもその視線を常に移動し続けていくメディア・スタディーズの方法論は、これまでの公共図書館にかかわる記述の平板さを克服し、文化政治的差異の中におかれた利用者と図書館の身体的連関を精緻に分析する有力なアプローチになるだろう。

メディア・スタディーズの批判的視座は、日本の図書館研究にとってもその重要性は変わらない。公的読書空間の中心部分に公共図書館が位置づけられてきた欧米とは異なり、日本では公共図書館を含めさまざまな文化施設・文化活動が読書空間を構成している。こうした多様な要素による文化的抗争は、公共図書館の特性や固有の領域を際立たせ、外部から公共図書館に対して投げかけられた問いに答えていくことは、公共図書館の存在を再考する強い契機となるにちがいない。

メディア・スタディーズとしての図書館研究は、実践と理論を往復しながらフィールドワークを中心とする実証的な分析を積み重ねることによって図書館情報学の内容を豊かにしていくものである。そして同時に図書館というメディア空間で、個人の多様な文化的営為として展開される図書館利用を批判的に問う新しい言葉を創っていくプロセスだといえる。

*Public Librarianship and Media Studies
by Yoshida-Yuko

**本学助手

臨床の学としての図書館情報学*

鈴木 正 紀**

図書館情報学は実学だといわれる。しかし、大学図書館の現場に身をおき、自分の仕事を支えるものとして図書館情報学を学び続けてきた立場から感じるのは、「図書館情報学は果たして実学たりえているのか？」ということである。「実学」とはもとより多様な意味を含んでいる。むしろ「臨床の学」とでもいったほうが、この小稿で述べる図書館情報学をより正確に表しているように思う。

「臨床医学」「臨床心理学」、例えばこうした「臨床」を名のる学問は、背景に自らを支える理論（必ずしも「体系」ではないかもしれないが）をもち、その現実への応用と検証と、そして理論では掬いきれない事態に向き合った際の、臨床家の人間的能力と経験と倫理によって、「人の命を救う」「人の心をケアする」といった現実の課題に応えることをその使命として発展を遂げてきた。

わが図書館情報学は、このような意味でのバックボーンとして臨床家（＝ライブラリアン）を支えているだろうか？ 図書館現場の多くはいまだに経験則が幅を利かせ、仕事を解決するために図書館情報学の知見が十分に発揮されているとはいえない状況がある。経験則が幅をきかせるということは、そうしたことが現実の課題を解決する上で、図書館情報学の、十分に現実に対応できない「理論」よりも実効性があると受けとめられるむきがあるからであろう。

しかしまた一方で、例えば計量書誌学のように理論的な精緻さを追究し、一定の成果をあげている領域も存在する。しかし、そうした精緻な理論も、必ずしも実践をつかさどるライブラリアンにとっては、医学図書館など一部を除いて、臨床的課題を解決する武器たりえていないのも事実なのである。

私たちの力不足、勉強不足はもちろんあろう。しかし、なにより考えるべきことは、そもそも実践と理論が生きた関係を構築出来ていないという、古くからある、困難な問題である。その解決の処方箋を書く力は私にはない。しかし、以下のことは、現場を抱える立場から述べておきたい。

根本彰は「図書館情報学における知的貧困」（『現代の図書館』Vol.39, No.2, p.64-71 (2001)）のなかで、

今後この学問が研究面において期待できる要素として、大学院数とそこに在籍する大学院生数の増加を挙げている。

このこと自体は確かに研究の厚みを増すという意味では望ましいことかもしれない（専門職養成のためのプロフェッショナル・スクールとしての大学院と研究主体の大学院の未分化、そして前者における、特に教育（トレーニング）プログラムの未熟さ、という問題については、ここでは触れない）。しかし、そうした大学院で研究する大学院生はどれほど「臨床の場」と切り結んでいるだろうか？

私は現在、非常勤講師としてある私立大学の司書課程で夜間の授業を担当しているが、そこでは一般の学生に混じって、図書館に職を持つ社会人が毎年何人か聴講をしている。彼／彼女たちから発せられるのは、授業に向かう態度の真剣さと、アクチュアルな問題意識である。

「現場」を抱えているからこそ持ちうる問題意識、そうしたものは確実に存在する。そもそも研究課題の原初の形とは、こうした生きた現実である現場から生まれ出てくるものであろう。

そうしたことを考えると、ここ数年、大学院に現職者が入学する、いわゆるリカレント教育が盛り上がりを見せつつあることには注目してよからう。そうしたなかには、現場の課題を解決するための理論的鍛錬と研究を自らの課題としている人たちも少なからず存在するだろう。こうした人たちの持つ「課題」「テーマ」が研究としてまとめられ、現場での検証を受けさらに研究を深化させる、そうしたダイナミズムをイメージすることは不可能ではない（とりわけ大学図書館についていえば、喫緊の課題である情報リテラシー教育に関する図書館情報学からの取り組みは、この国ではまだまだ十分ではない）。また一方で、現場経験をもたない大学院生は逆になんらかの形で現場を経験し（例えばインターンシップのようなもの）、それを研究に生かすという方策も考えてよいだろう。

「学」と「現場」の分離した状態が、お互いにとって不幸な状態であることはいままでもない。結果として図書館情報学そのものの衰弱を招くことも危惧される。現職者大学院生の存在は、そうした状態に橋を渡すひとつの可能性をもっているのではないだろうか。

*Library and Information Science as Clinical Study
by Suzuki-Masanori

**文教大学湘南図書館司書、本学大学院 7 期生

司書課程と図書館情報学*

田 中 岳 文**

図書館情報学は、現場に立脚した実学だといわれる。ここでいう現場とは、図書館を含む情報サービス機関であり広い意味での現場とその関係の諸事象をさす。しかし、実学である以上、その現場でサービスにかかわる人材の養成もまた図書館情報学の枠組みに入ってくる。その意味で図書館情報学教育もまた実学であるがゆえの“現場”といえよう。

「日本の図書館情報学教育」¹⁾をみると、その索引にある名前はざっと1,600名。ただし相当数の他専攻の兼任者も含まれている。日本図書館協会図書館学教育部会の部会員数は約250名であるので、図書館情報学の教員数はふたつの数の間と考えてよいだろう。これらには図書館情報大学など専攻としていところも含まれるが、多くは司書課程に関与している者と考えられる。全国の4年制大学および短期大学に置かれるいわゆる司書課程は200を超えている。それらの開講科目名称がいわゆる省令科目とほぼ同じであることからもうかがえるとおり、多くは図書館法による司書養成の枠組みで設置されていると考えられる。

さて、農学という領域がある。広く生物の活動を人間生活に役立てようという実学である。たとえば園芸学、育種学、林学、畜産学、醸造学、農業経済学、農村社会学、農業工学、国際開発学といった領域を内部に含んでおり、「研究活動資源ディレクトリ」²⁾によれば農学を専攻とする国公私・4年制大学院短大の教員数はあわせて8,000人を超える。関係分野への人材を送りだすことも、実学として農学の社会的責務のひとつである。実際、高校農業科教員資格や、管理栄養士、農業改良普及員、さらには、みそ製造技能士といったものにいたるまで、農学分野に関係するさまざまなライセンスに関わる部分をカリキュラムのなかに持っている。もちろん、それぞ

れあくまでオプションな一要素としてである。

ひるがえって、図書館情報学からみて司書課程とはなんだろうか。実学としての図書館情報学の人材育成システムの体現ということには違和感がある。そもそも、司書課程のバックボーンが図書館情報学であるというには、前述のとおり司書課程設置のよりどころが特定館種を規定した図書館法であることから無理があろう。本来実学の体系の重要な一部である人材育成が、システムの中にうまくおさまらないのはおかしい。図書館情報学のありようを考えるためには、司書課程という図書館情報学の“現場”にも目を向ける必要がありそうである。

複数の司書課程に関わった者として、特に次の二点に関心がある。ひとつは、特定館種を想定しない司書課程(そうすると『司書』課程とはいわないかもしれない)は、現実に存在可能かということである。実学である図書館情報学にあって養成の現場が特定館種に傾いているのはおかしいことである一方で、司書講習省令科目から離れることは大学経営あるいは学内政治の面から簡単なことではない。

もうひとつは、どうすればふたつの現場を含めて図書館情報学という系の下に理念を共有できるかということである。経験豊かな現場出身の司書課程担当者にしても、計算機科学など他領域出身の図書館情報学研究者にしても、図書館情報学を体系的に学んでいない場合が多いのではないか。基本的に関係者は自らの体系の中で教育を受けている農学との対比において興味深い。考えるヒントはこんなところにもありそうな気がしている。

1) 日本図書館協会.日本の図書館情報学教育2000.東京,日本図書館協会,2000,279p.(ISBN 4-8204-0004-5)

2) 国立情報学研究所.研究活動資源ディレクトリ.(オンライン),入手先 <<http://dirr.nii.ac.jp/>>,(参照2002-07-01).

*Are Librarian Courses in Japan a Part of Library and Information Science? by Tanaka-Takefumi

**東海大学課程資格教育センター専任講師,本学大学院6期生

変革を生き抜くために*

藤 井 敦**

今回のテーマは「図書館情報学の新たな方向」だそう。しかし、テーマから外れた話が一つくらいあってもいいだろうと思い、「新たな方向(未来)」ではなく「いまそこにある危機(現在)」について書くことにする。

学問(含図書館情報学)の存続には、それを支える人材と彼らが専業の学者として生活するための金(給与・研究予算)が必要だ。人材は狭義には教官を指し、広義には研究室に所属する学生も含む。これら無くして学問が自律的に発展することはない。

大学統合と独法化へ向けての変革の中で、もはや思考停止状態の読者もいるかもしれない。簡単に言えば、我々は規制緩和の矢面に立たされている。この場合の規制とは「国立大学」という特権である。では、この規制がなくなると、学問を支える「人」と「金」にどう影響するのだろうか？

まず、「人」特に学生について考えてみよう。従来の国立大学(旧国立大学)において、組織としての「学部」の規模は今後確実に縮小する。私立大学の攻勢はもとより、予備校のような、いわゆる受験産業までもが様々な形で大学ビジネスに参入するからだ。今でさえ、大学講義の補習に予備校のテキストを使うような御時世である。しかも、経営や企画の能力は彼らの方が圧倒的に上だ。

結局、旧国立大学は、大学院大学、すなわち研究者養成を主たるミッションとした研究(教育)機関として存続し、私大や受験産業との棲み分けを余儀なくされるだろう。ここで、学部と切り離された状態で、どうやって大学院生を集めるかが問題になる。どこかの私大と提携して顧客を確保すればいいという安直な発想(正論?)もあるかもしれない。しかし、大切なことは、スタッフの「顔」、すなわち、ど

んな教官がどんな研究をしているかが「学外」からキチンと見えることである。集客力のある魅力的なテーマや指導能力を持つ教官が一定数は必要だ。事実、そういう「スター教官」に全国から多くの学生が集まる現状を既存の大学院大学に見ることができる。

学生の選別方法も重要である。「やる気」だけを抛り所にした方法には自ずと限界がある。やる気なんでもものは、いつなくなるか分からないからだ。むしろ、人間である以上、2～3年という長期に渡って、やる気を常に保つことの方が難しい。それに対して、長年かけて培った学力や職人芸は簡単に人を裏切らない。志願者が、その場限りの“やる気”を声高に叫ぶ確信犯なのか、それとも潜在能力を秘めた「金の卵」なのかを見極めるための確かな目が教官の側に要求されている。

最後に「金」について書こう。独法化に伴って、天から降っていた予算は劇的に縮小し、今まで以上に外部資金の獲得が重要になる。先日、某研究助成金のヒアリングに何とかこぎつけた。審査官から「テーマも良いし計画もちゃんとしているし、科研費に出せばいいのではないか？」と言われた。皮肉にも該テーマで科研費から不採択の通知を受けたその日に、である。科研費の申請書は(申請者名や大学名だけ見て)内容は見てもらえなかったのだろう。成果が見込めない対象に投資する人間はいないわけで、結局ここでも「顔」が見えているかどうかが明暗を分けたことになる。

こうして書くと、すべては「当たり前」の積み重ねである。しかし、どれも適切に対処しなければ、図書館情報学の未来はもとより、生活の糧さえ無くなる現実を直視しなければならない。

* How to Survive Changes by Fujii-Atsushi

**本学助手

既知の情報・新しい情報*

金 藤 伴 成**

図書館のレファレンスデスクで質問を受けた時に気になるのは、自分はその問題についてどこまで知っていて、何を知らないかということだ。それは恐らく質問する側にとっても同じことで、全く無知のまま質問に訪れることはないから、何かを知っていて何かを知らないという問題状況にある。

四苦八苦しながらレファレンスツールを使って回答した後では、その回答が果たして質問する側の問題に対して適切だったかどうかにも気にかかる。利用者の口ぶり、表情などでしかうかがい知ることではできない。利用者の満足、あるいは情報による問題解決の度合いを厳密に測定する仕組みがあればよいが残念ながら存在しない。質問する側にとってもこの問題は残っていて、回答に一応満足して席を離れたもののよく考えてみるとあの回答では不十分であったとか、問題に合致した回答であったもののそれはすでに知っていることで何の役にも立たなかったということがあり得る。

どのようにすれば適合性の高い情報を効率的に得られるかというのは、図書館情報学の主要な課題のひとつである。ある問題状況にある心的な状態を完全に展開して記述できるような機構があると仮定して、そこに探索対象となる情報を一つずつ与えていくと、問題に対してもっとも適合性の高い情報を得られると個人的に考えていた時期があった。実現可能性はゼロに近いが原理的には考え得る方法である。しかし、情報の受容は一般に可逆性を持っていないので、ある情報 a を受容した後には当初の問題状況が変わっている可能性がある。情報 b が情報 a の先に与えられるか後に与えられるかによって、情報 b の適合性は変わる可能性があるから、これでは特定の問題状況で情報探索を行う方法にはならない。

情報には既知の情報(given information)と新しい

情報(new information)がある。とても単純な例では、「一週間で〇〇という文献は入手できますか？」という問いに対して、「二週間はかかります」という回答を得た場合、まず字義通りの情報として〈文献を入手するには二週間かかる〉(新情報 1)が手に入る。しかし、得られた新情報 1 は文献を入手できるか否かに答える情報ではないため、聞き手にとって十分でない。自分が持っている既知の情報〈一週間で入手したい〉と新情報 1 に基づいて推論することによって〈文献は入手できない〉(新情報 2)と、〈さらに一週間待てば文献を入手できる〉(新情報 3)が導出される。

このように、あるメッセージから得られる新情報には字義的なものとそこから推論して得られるものの 2 種類があり、後者は既知の情報とメッセージとの境界面に生じていると考えることができる。従って、メッセージを得ることイコール必要な情報を得ることにはならず、既知の情報の内容や水準が得られる情報に対して大きく影響する。また、得られた新情報は直後に既知の情報となり、別の問題状況における背景知識となる。さらに、例とは異なり、既知の情報が顕在化していない場合もあるので、双方向的なやりとりの中で行われる情報探索では、聞き手にとっては自分が、話し手にとっては相手が何を知っていて、何を知らないかを把握することが求められる。

ある事柄を情報によって解決しようとする問題状況は、問題単体で存在するのではなく、問題を取り巻く既知の情報や背景知識と一体的にある。そのため、探索対象の情報源や資料だけを組織化しても、どのような問題状況にあるのかを理解しないと効果的な探索を期待することは難しい。情報探索では対象情報あるいは資料を扱うことだけでなく、既知の情報を含む問題状況を適切に扱うことが重要である。

* Given and New Information by Kinto-Tomonari

** 図書館情報課情報奉仕係、本学大学院生

図書館情報学と哲学*

横山 幹子**

一見したところ、図書館情報学と哲学はあまり関係のない学問のように思われる。そして、実際、哲学の研究者の多くは、哲学が図書館情報学と関係があるとは思っていない。けれども、本当にそうだろうか。私は、そうではないと思っている。以下において、その点について述べたい。

まず、図書館情報学がどのような学問なのかの問題である。その際、図書館情報学の教育を受けてこなかった者にとっては、専門家が書いていることを手がかりにするしかない。津田良成編『図書館・情報学概論第二版』では次のように書かれている。「もはや現在では図書館もそれらの情報を組織的に扱う社会的機関の一つであり、したがってその図書館について学ぶ図書館学は、より広い範囲の情報の諸問題を研究する情報学の一部を形成するものであるという考えが成立する。」(津田良成編。図書館・情報学概論。第二版。東京、勁草書房、1990、1p.)もちろん、どの学問の場合でもその学問分野の定義は難しく、〈図書館情報学とは何か〉という問いに対して、今引用した箇所から見て取れる答だけが唯一の答とは限らない。しかし、それが図書館情報学についての一つの考え方であることは間違いないだろう。したがってここでは、図書館情報学を以上のようなものとして捉えた上で話を進めていきたい。

さて、上記のように、もし図書館情報学が「情報の諸問題を研究する」とことと密接なつながりがあるならば、図書館情報学は少なくとも哲学のある分野とも密接な関わりを持つことになる。なぜなら、情報の概念を明らかにするためには、〈知識とは何か〉、〈言語とは何か〉、〈言葉の意味とは何か〉、〈言葉に限らず記号一般の機能は何か〉というような哲学において大きな部分を占めている問題を考察しなければならなくなるからである。

たとえば、言葉の意味について考えてみよう。『岩波哲学・思想事典』の意味の項には、言葉の意味とは何かという問いへの答え方として次のようなものが挙げられている。「①「夏目漱石」が特定の個人を意味するように、意味とは語が指示する対象である。②「明けの明星」と「宵の明星」が指示対象については同一でありながら、意味を異にするように、意味とは語と対象とを媒介する何らかの心象、対象の与えられ方である。③「火事だ」が人々の避難・消火活動を引き起こすように、意味とは何らかの行動・反応、場合によっては認識を招来するものである。」

(廣松渉ほか編。岩波哲学・思想事典。東京、岩波書店、1998、p.96.)ここで述べられている意味が指示対象であるという考えは、情報を外的なものであるとする考え方に通じる。また、意味が心象、対象の与えられ方(心象と対象の与えられ方は別のものであるが、世界の側の事物とは別に意味を考える点では似ているのでここでは同列に扱う)であると考ええるならば、情報に関しても、われわれの側の理解が問題になる。さらに、意味が何らかの行動・反応等を引き起こすものであると考えるならば、情報に関しても、情報の受け手に与える効果が問題になる。このように、〈意味とは何か〉という問いに対する答え方の違いが、情報をどのように捉えるかに影響を及ぼすのである。そして、ここでは詳しく述べないが、この意味論と図書館情報学との関わりと同様に、知識論、記号論等も図書館情報学と関係しうるだろう。

以上のように考えるならば、図書館情報学と哲学は一見して思われるほどには無関係な学問分野ではなく、大いに関係のある学問分野であると思われるのである。

*“Library and Information Science” and Philosophy
by Yokoyama-Mikiko

**本学助手

図書館情報学の対象としての「情報」と「メディア」*

緑 川 信 之**

図書館情報学の最も基本的な対象は「情報」と「メディア」だと思います。しかし、この2つの概念については重大な誤解があるように思います。

ふつう、私たちは、文字などが書かれているメディア（以下、メディアとは文字などの記号が書かれているものを指すことにします）を見て「情報を得た」と感じます。では、この情報はどこから来たのでしょうか。メディアの中に含まれていたのでしょうか。そうではないと思います。

もし、情報が〈モノ〉のようにメディアの中に存在しているのなら、同じメディアからは常に同じ情報が得られるはずですが、実際には、同じメディアを見ても異なる情報を得たり、情報が得られないことさえあります。また、メディア以外のもの（空の雲など）を見ても「雨が降る」などの情報を得ることがありますが、空の雲からさえも情報が得られるなら、情報はあらゆるところに存在することになってしまいます。したがって、メディアの中に情報は含まれていないと考える方が妥当だと思います。

では、なぜメディアを見たときに「情報が得られた」と感じるのでしょうか。それは、メディアを見て知識状態が変化したときに、その変化した分だけ何か加わったと感じ、その何かを「情報」と名づけているのだと思います。

送り手は受け手の知識状態を変化させようとしてメディアを作成し、受け手はメディアを見て知識状態を変化させます。しかし、送り手が受け手に及ぼそうと意図した知識状態の変化と、受け手において実際に生じた知識状態の変化がいつも一致するとは限りません。送り手と受け手の間で伝達されるのはメディアだけであり、情報という〈モノ〉ではないからです。

では、なぜ、メディアとともに情報という〈モノ〉

が伝達されるように見えるのでしょうか。それは、結果として、送り手が意図した知識状態の変化と受け手において実際に生じた知識状態の変化がほぼ一致する人が多いからだだと思います。送り手と受け手のところで、つまり、入口と出口で同じ場合が多いので、メディアとともに「情報」も一緒に伝達されていくように見えるのだと思います。左手で隠した銀貨が右手から出てくる手品を見て、あたかも銀貨自体が左手から右手に移動したように感じるのと同じです。

これまで、図書館情報学では〈モノ〉として扱える情報について中心的に研究してきました。それ自体は適切なアプローチといえます。多くの場合において、情報は〈モノ〉のように見え、〈モノ〉として扱う方が実用上都合がよいこともあるからです。しかし、実際には情報は〈モノ〉ではありません。〈モノ〉としての情報を扱っているように見えるのは幻想で、実は扱っているのはメディアなのです。

メディアには、「形式」「機能」「内容」という3つの側面があります。形式面は、物理的性質や出版形態などです。メディアの形式面が情報と混同されることは少ないと思います。メディアの機能面は、たとえば、経済学（という学問分野）の論文、0と1（という意味づけをされた）の電気信号、などです。〈モノ〉としての情報と混同されている、あるいは、〈モノ〉としての情報が含まれているように見えるのはメディアの機能面なのです。論文を書くこと自体を「情報の生産」とみなしたり、論文の数を「情報量」とみなしたりするのは、その典型です。図書館情報学で（〈モノ〉としての）「情報」を扱っていると思っていたのは、実はメディアの機能面だったのです。

知識状態を変化させる、つまり、本当の意味での「情報」をもたらすのは、メディアの内容面です。これからの図書館情報学は、もっとメディアの内容面を扱うべきだと思います。

*“Information” and “Information Media” as Objects of Library and Information Science
by Midorikawa-Nobuyuki

**本学教授

図書館情報学のソリューション*

岩 澤 まり子**

図書館情報学が研究の対象とする『情報』は、水が如きものである。

水には、固体、液体、気体の三つの状態がある。つまり、氷、水、水蒸気である。いずれも二つの水素原子と一つの酸素原子が共有結合した分子構造をもち、状態が変わっても、水の分子式は変わらない。この水の組成は、1783年にラボアジュが、水素と酸素の混合比を変えて燃焼させ、容積比が2:1のとき、水素も酸素も残らず完全に水に変わることを実験により確認して、決定された。その後、様々な研究が行なわれて、水の科学が進歩してきた。

『情報』にも、水と同様に様々な状態がある。捉え方はいろいろあるが、気体状態の『情報』には、データがある。様々な場所で発生し、内容および質など、多種多様なものが目に見えない状態で浮遊している。大気中に溶け込んでいる水のように、知らないうちに取り込んで、生活に利用しているものもある。大気中の水分が減少して異常乾燥注意報がでている季節には、渴いてのどを痛めてしまうことがあるように、気体状態の『情報』も、無くなってしまつては、私たちは渴いてしまう。これらの浮遊しているデータを取り込み、その価値を認識すると、データは突然情報へと変化する。水でいう液化であるが、『情報』では益化と表記したい。

『情報』が液体状態になると、手にとり、目に見えるようになる。データを集めて編集することにより誕生する情報の状態であり、印刷物やデータベースなど、様々なものがある。つまり器に合わせて情報の形態は変化し、器が紙であれば図書などに、コンピュータであればデータベースなどとなる。これらの器は、情報を閉じ込めるためのものではなく、後から情報を取り出すためにある。したがって、器には、情報

の入口と出口をあらかじめ考慮しておく必要がある。

『情報』が固体状態となると、液体状態と同様に、手にとり、見るができるようになる。情報を蓄積し評価することにより生じた知識が、情報の固体状態として捉えることができる。固体としての形を得るためには器が必要なことがあるが、核があれば水の美しい結晶が生成するように、自然発生的に知識が形成されることもある。一旦形を得れば、知識は様々な場面で活用されていく。状態により水が気体状態に昇華するように、知識も新たな真理が解明されるとともに、その状態を変化させる可能性がある。また形を失い、人の中に存在し続けることもある。

最近では、情報担当重役であるCIOが、さらに知識担当重役のCKOが一部の企業に配置され、情報と知識の重要性が企業では認識されつつある。水を制するものが社会を制するように、『情報』を制するものは世界を制する。

この『情報』の三態に関わる学問が、図書館情報学であると考えられる。『情報』の状態に分化した研究は、今までになされてきた。これからは各状態を統合した研究が行なわれる必要がある。様々な専門分野の『情報』が出会い議論してはじめて、栄養に富んだ『情報』を生み出す図書館情報学へ発展するであろう。

水は循環して自然界を潤すのと同様に、図書館情報学が生み出す『情報』が知的コミュニティを潤して欲しいと期待してやまない。

* Solution of Library and Information Science by Iwasawa-Mariko

**本学助教授

音楽認知と音楽情報検索*

平 賀 譲**

いただいたタイトルは認知科学全般と図書館情報学との関わりといったものであったが、それでは話が広がりすぎてしまうので、ここでは筆者の専門である音楽認知研究との接点を取り上げてみたい。

音楽認知は心理学、音楽学、情報科学などにまたがる学際的な研究分野だが、これまではどちらかと言えば細々と行われてきた感が否めない。それが最近、音楽情報検索との関連で少し事情が変わってきた。

音楽情報検索というと第一に思いつくのは、曲名、作曲者名、演奏者名などからの検索だろう。これは通常のテキストベースの書誌情報検索と本質的には同じであり、タグ付けなどに音楽固有の事情はいろいろあるものの、特別な話は少ない。

これとは別の形の音楽情報検索が、楽曲そのもの、つまりコンテンツから直接検索を行おうというものである。これはさらに大きく2つに分けられる。1つは特定のメロディなどが頭にあって、曲名等のデータを知りたい場合であり、もう1つは特定の曲を探すのではなく、「明るい、力強い」といったイメージに合うような曲の例を探したい場合である。前者を仮に「メロディ検索」、後者を「感性情報検索」と呼んでおこう。

ここ数年で大きく変わってきたのは、デジタル化された音楽データ、とりわけインターネット上で入手できる音楽データが急激に増大してきた点である。これに伴い、音楽コンテンツ検索への関心や、実用的な重要性が高まってきている。研究のほうも、従来はごく一部で個別に行われていたものが、一昨年から音楽情報検索国際ワークショップが開催され、本年第3回を迎えるなど、研究活動が飛躍的に活発になってきている。

一口に音楽データと言っても、音楽CDのような音響信号のものと、MIDI 符号のように音の高さなどが記号化されたものとがあり、データ量や扱いは大きく異なる。インターネット等ではどちらの形式のものも存在するが、当然ながら、音響データのほうが扱いは難しくなる。テキストで言えば、フォント

を展開した画像データと、文字コードによるデータとの違いのようなものである。

メロディ検索は、検索キーをどう入力するか、それがどの程度正確かといった点で、テキスト検索とは質的に異なる。メロディを文字キーボードから打ち込むのではやりきれないし、ピアノ鍵盤も誰でもが使えるわけではない。ハミングだと音響解析が必要となり、歌われる音程そのものが不安定だし、解析精度にもまだまだ問題が多い。

そうでなくても、入力キーと、データベース中の曲データとは音程、テンポ、リズムのいずれにも多くの不一致があるのがむしろ普通で、その不一致をどう吸収するかは中心的な課題になる。テキストで言えば、スペルミスだらけの検索キーで検索を行うようなものである。人間にとって、知った曲を即座に言い当てるのは何でもないことに思えるが、それをコンピュータで実現するのは想像以上に難しいものである。

さらに感性情報検索となると、欲しい曲の印象をどのように表現するか、それを曲のどのような特徴に対応づけるか、得られた結果をそもそもどう評価すべきかなど、課題は多い。

メロディ検索で現在主流となっているのは、音符列などの表層的手がかりに対して、統計的パターン照合の手法を応用するアプローチである。中には1万曲規模のデータベースから秒単位で検索を行える印象的なシステムもあるが、一方では限界もある。「スペルミス」といっても、食い違いは全くランダムというわけではなく、音楽的に許容できるものも多い。それらを峻別しないと、検索結果に多くのノイズが入ってしまうことになる。また主題に対する変奏を探すといったような、高度に構造的な検索要求に対しては、表層的手がかりに頼る手法は無力である。

そこで音楽構造や人間の音楽認知の特性などを踏まえた取り組みが必要になってくる。これに対する音楽認知研究のほうもまだ十分な水準に達しているとは言えないが、こういった実用的な用途の開拓も交えて、研究全般の大きな発展を期待したい。

一方図書館情報学にとっても、このようなコンテンツ主導の検索、人間により密着した形での検索、その背景としての認知科学研究との接点は、今後ますます重要性を増していくものと思われる。

* Music Cognition and Music Information Retrieval
by Hiraga-Yuzuru

**本学助教授

図書館情報学の新たな方向*

綿 坂 豊 昭**

本年五月下旬、日本大学文理学部創設百周年記念貴重書展「書物が伝える日本の美」が催された。貴重書展とされるだけあり、展示本の大半はかなり古いもので、そこにいる人は、いかにもそうしたものを見に来る人であった。だが、そのおりの図録には、図録を電子化したCDが付いていた。

こうしたことなどが多くあることもあって、デジタルなものを発想の基盤におくことなく、文学に関係することを考えることは少なくなった。当然、図書館について考えたりするときの発想基盤に、「電子図書館」なるものがあるようになった。図書館情報学についても同様である。

前置きが長くなったが、今後、電子化が進むという前提でいえば、文学（作品・作者関連資料等を含む）に関しては、図書館業界は、いわば〈中央〉と〈地方〉という立場を鮮明にすべきと考える。

〈中央〉は、情報センターのような機能を持ち、これまで生産された全国的な文学を電子化した形で、蓄積、管理し、そしてそれを地方に提供すべきであるとする。現在、国文学研究資料館が、岩波書店の旧古典文学大系の本文を提供しているが、それが古典文学にとどまらないものがあつたらいいと思う。その組織のあり方、運営の仕方、何を、どのような順番で、どのように電子化するか、それをどのように蓄積し、管理するか、またそれをどのように提供するか、著作権などの情報提供するにあたっての問題の対処の仕方、こういったことが図書館情報学の重要課題になると思われる。

では〈地方〉はどうあるべきか。自宅にパソコンがなかったり、金銭的に余裕のない人のために、〈中央〉からの情報を得る場を提供すべきである。一方、地方色の濃い文学を電子化し、蓄積、管理し、地元

はもちろん、〈中央〉やその他の〈地方〉に提供すべきであるとする。質のよい情報を、常日頃から収集し、蓄積・管理・提供できる司書の育成方法を扱う図書館情報学も必要であろう。地元のこだわりこそが重要と考える。

最近、内藤佐登子氏が、古書目録の連載記事をまとめられ『紹巴富士見道記の世界』（続群書類従完成会）を上梓された。現地を丹念に訪れ、その土地の郷土関連文献にもよく目を通された労作である。地元での調査にあたっては、図書館、教育委員会などに行かれたそうである。地方のことは、まずその地方の図書館で調査するというのが、人文学研究の基本である。こうしたことに対応できる司書がのぞまれる。

文学情報の蓄積、管理、提供ということに関係するデジタルな研究は本学でもなされている。例えば、昨年度、石塚先生が指導された院生の研究に、古典文学の注の付け方に関するものがあつたが、それなどは研究成果の蓄積という観点で注目されるし、宇陀先生が指導された学生の研究に、往来物に関するものがあつたが、それは資料の見せ方という点で注目された。こうした研究が、図書館情報学として意義あるものとなるかは、実際の図書館と図書館情報学がどのようにかわるか、さらに将来図書館はどのようなになるか、なるべきか、なすべきか、ということと深くかかわっている。そうしたものへの新たな視点こそが図書館情報学の新たな方向を示唆すると思われる。

*A New Point of View in Library and Information Science by Watanuki-Toyoaki

**本学教授

図書館情報学の新たな方向 ―理学研究者の視点―*

中山伸一**

いささか理研究者としては錆び付いてしまったかもしれないが、最近考えていることを述べる。

理研究者は物事を細分化するのが好きである

日本語では、雨などの基礎語をさらに細かく区分しようとする時、大雨、小糠雨、雷雨などのようにして複合語を作る。この時、一般的に概念を細分化する言葉を主たる概念を表す語の接頭語として付ける。

図書館情報学は、図書館学と情報学との融合を目指した学問領域であるが、¹実はその融合の方向性には、図書館情報学と情報図書館学の二種類が考えられる。図書館情報大学は前者の名前をとった。すなわち、情報学の一分野としての位置付けである。後者の場合、情報学の方法を用いた図書館学となり、筆者のような者の居場所は無かったかもしれない。理研究者はなんでも体系化したがる

図書館学は図書館と言うモノを扱う学問領域であるため、そこで使われている物やシステムが研究の対象となる。建物や什器に関してどのように設計し配置するかを図書館建築論が行う。図書や文献の知識を図書学・書誌学や情報流通論で論じる。各種の媒体の特質については情報資料媒体論が検討し、それらを提供するためのシステムを情報組織化論と情報検索論が担う。利用者に対するレファレンスワークを情報サービス論が扱う。図書館自体の運営・管理を経営論で考える。さらに、図書館の歴史と社会制度的な位置付けを図書館文化史、制度論で講じる。

この体系は、情報図書館学の体系といえよう。一方、情報学の定義は様々言われているが、某大学では、複雑で動的に変化するシステムにおける、情報の生成、認識、表現、収集、組織化、最適化、変換、伝達、評価、制御を対象とするということを掲げている。ちなみに、人文社会学や自然科学の領域と相互に密接な関係を持つともしている。

理研究者は何が新しいかということを重視する

図書館は紙メディアの上に載った情報を扱う。しかし、近年情報は様々な所に載りはじめた。カセットテープやビデオテープの上、フロッピーディスクの上、CDの上、はたまたMDだのDVDなど枚挙にいとまがない。そして、ついには特定の物理的メディアに依存しない情報が世に溢れるようになった。すなわちインターネット上の情報である。これまでの図書や文献は紙と言うメディアに縛られていた。そして図書館学は図書や文献に掲載されている情報に捕らわれていた。しかし、図書館情報学ではメディアにとらわれることなく情報を扱うことが求められている。

情報が物理的メディアと密接に関わっていたため、物理的メディアそのものの情報がそれに載っている情報を補完するものとなり、目録論や書誌学が生まれた。しかし物理的メディアの無い情報になる時、それがどのような新たな学問を生み出すのかは興味深い所である。

理研究者はいつも未来を夢見る

図書館情報大学は、紙メディアを扱うという意味において出版・流通に至るまで図書館情報学の領域を広げ、そしてコンピュータを扱うという意味においてプログラミングから人工知能に至るまでその領域を広げて出発した。そして、図書館情報大学の新しい領域として、知識情報論講座を設定したのは記憶に新しい。これはまさに図書館情報学を、情報の収集、組織化を行う情報図書館学の枠から、生成、認識、表現を加えた情報学へ広げたことを意味する。

このように図書館情報学が融合した情報学は、周辺に情報図書館学を含むさまざまな応用情報学領域を配し、情報学の知識を応用情報学に適用し、また応用情報学で生まれた新たな方法を情報学にフィードバックさせるという新たなシステムを生み出していくことであろう。

最後に、筆者を育てくれた図書館情報大学に感謝の意を表する。

*A Future of Library and Information Sciences -A Day Dream of a Scientist- by Nakayama Shin-ichi

**本学教授

図書館情報大学附属図書館報総目次

創刊号, 10周年・20周年特別号, 最終号各目次

創刊の辞	藤川正信	1 (1)
創刊に寄せて	田俊貞夫	1 (1)
創刊に寄せて	熊谷俊夫	1 (1)
附属図書館の10年に思う	藤川正信	5 (3)
これからの10年	竹内哲	5 (3)
図書館情報課がスタートした日	熊谷俊夫	5 (3)
附属図書館報創刊のころ	田中幸夫	5 (3)
附属図書館の10年に寄せて	外村弘臣	5 (3)
二つの型 —附属図書館の10年に寄せて—	下村夫	5 (3)
附属図書館の10年の歩み—年譜と統計—	附属図書館報編集委員会	5 (3)
附属図書館の20年	藤野幸雄	15 (3)
再び「これからの10年」	竹内哲	15 (3)
附属図書館の10年の歩み—年譜と統計—	附属図書館報編集委員会	15 (3)
総合情報処理センター発足の頃	湯本一義	15 (3)
新たな千年紀に向けて	山下洋一	15 (3)
新たな20年	川瀬正幸	15 (3)
よき伝統—附属図書館の20年に寄せて—	大場秀穂	15 (3)
20年目の図書館	大曾根美奈	15 (3)
10年前、そして現在	岡田信子	15 (3)
図書館情報学の新たな方向	植松貞夫	18 (3/4)
メディア・スタディーズとしての公共図書館研究	吉田右子	18 (3/4)
臨床の学としての図書館情報学	鈴木正紀	18 (3/4)
司書課程と図書館情報学	田中岳文	18 (3/4)
変革を生き抜くために	藤井敦	18 (3/4)
既知の情報・新しい情報	金藤伴成	18 (3/4)
図書館情報学と哲学	横山幹子	18 (3/4)
図書館情報学の対象としての「情報」と「メディア」	緑川信之	18 (3/4)
図書館情報学のソリューション	岩澤まり子	18 (3/4)
音楽認知と音楽情報検索	平賀譲	18 (3/4)
図書館情報学の新たな方向	綿坂豊昭	18 (3/4)
図書館情報学の新たな方向 —理学研究者からの視点—	中山伸一	18 (3/4)

論 説

International Library and Information Center の構想	竹内哲	1 (2)
最近の米国図書館学校の動き—シラキュース大学 情報資源管理学コースの例—	桜井宣隆	1 (3)
附属図書館の資料収集方針について (1)	藤川正信	1 (4)
附属図書館の資料収集方針について (2)	藤川正信	2 (1)
現代中国の図書館	藤野幸雄	2 (2)
IFLA 東京大会参加者を本学に迎えて	藤川正信	2 (3)
図書館とデータベース	大瀬戸豪志	2 (4)
オーストラリアのコンピュータ事情	杉村優	3 (1)
科学は普遍的か	佐藤隆司	3 (2)
第2次資料収集計画について	藤川正信	3 (3)
館長に就任して	竹内哲	3 (4)
UCLAの図書館システム	石川徹	4 (1)
韓国図書館管見記	桜井宣隆	4 (2)
図書館資源マネジメントと医学図書館	野添篤毅	4 (3)
ロバート M. ヘイズ博士を迎えて	松村多美子	4 (4)
統一分類の適用について—中国古典の場合—	和泉新	5 (1)
附属図書館の現状と課題	竹内哲	5 (2)
ワシントン大学の図書館活動	郡司良夫	5 (4)
90年代の初めに	藤原祥三	6 (1)
ワルシャワの図書館員	藤野幸雄	6 (2)
図書館情報学界の群像と日本人	桜井宣隆	6 (3)
索引の楽しみ	徳山五郎	6 (4)
ウォーリック大学とその周辺	松本紳	7 (1)
パリの図書館の印象	寺田光孝	7 (2)
図書館長・東海林太郎	竹内哲	7 (3)
熊本近代文学館と種田山頭火	志村尚夫	7 (4)
オーストラリアの大学界の近況	杉村優	8 (1)

開館時間を増やすには……………	山本	毅雄	8 (2)
図書館の土曜日開館について……………	竹内	振	8 (3)
追憶 図書館と少年時代……………	黒岩	高明	8 (4)
馬場先生の手稿・蔵書資料の整理について……………	佐藤	隆司	9 (1)
英国図書館 (British Library) 見聞録……………	緑川	信之	9 (2)
フィンランド・スウェーデン図書館見聞録……………	植松	貞夫	9 (3)
国際電子出版会議に出席して……………	松村	多美子	9 (4)
図書館の時代……………	藤野	幸雄	10 (1)
図書館情報大学学生の一側面について……………	和光	信也	10 (2)
全文データベースのための技術: SGML (その1)……………	石塚	英弘	10 (3)
全文データベースのための技術: SGML (その2)……………	石塚	英弘	10 (4)
OCLC 研究部に滞在して……………	谷口	祥一	11 (1)
テネシー大学図書館雑感……………	長谷川	秀彦	11 (2)
書名と中身……………	小野寺	和夫	11 (3)
イエール大学法律図書館の精神……………	原	秀成	11 (4)
分類と情報化のはざま—最終講義発表要旨—……………	志村	尚夫	12 (1)
ベトナムの図書館・情報サービス……………	松村	多美子	12 (2)
歴史史料データベース化に思うこと……………	松本	浩一	12 (3)
オックスフォード見聞記……………	磯谷	順一	12 (4)
揚げばなつかし……………	赤星	隆子	13 (1)
北欧の公共図書館における貸出返却のセルフサービス化……………	植松	貞夫	13 (2)
幻想図書館の虚実……………	金子	子務	13 (3)
エストニア国立図書館……………	藤野	幸雄	13 (4)
フンボルト大学日本研究センター図書室……………	島谷	祐枝	14 (1)
シェフィールド雑感……………	中山	伸一	14 (2)
プログラム言語と抽象化……………	中田	育男	14 (3)
ドイツ, 時刻表, データベース……………	小野寺	夏生	14 (4)
デジタル図書館の時代……………	藤野	幸雄	15 (1)
図書館情報大学の「デジタル図書館システム」……………	田畑	孝一	15 (1)
電子図書館とは何か……………	原田	勝	15 (1)
文献学の重要性……………	和泉	新夫	15 (2)
これからの附属図書館像に向けて……………	植松	貞夫	15 (4)
図書館情報学の社会科学的側面 —情報資料媒体論と 情報メディア論との関係における管見—……………	大庭	治夫	16 (1)
図書館情報メディア開発基盤論……………	松浦	克昌	16 (2)
アーキビストの出番……………	山本	毅雄	16 (3)
「情報貧困」脱却をめざして: ラオスでの図書館ワークショップ……………	永田	治樹	16 (4)
中世における或る無名僧の読書……………	今泉	淑夫	17 (1)
生涯学習のための図書館情報学……………	関口	礼子	17 (2)
ヨーロッパの国立図書館の変身……………	植松	貞夫	17 (3)
図書館情報学と私……………	森	茜	17 (4)
メタデータと Interoperability……………	杵本	重雄	18 (1)

附属図書館活動

附属図書館の現状と課題……………	田中	幸夫	1 (1)
図書館情報システム開発センターの機能について……………	小野	実	1 (2)
図書館情報大学・東京大学文献情報センター 合同研究討論会について……………	山本	毅雄	1 (3)
公開図書室の紹介……………	郡司	高子	1 (4)
メディア機器センターについて……………	郡司	良夫	2 (1)
図書館業務システム LIAISON について……………	郡司	良夫	
	石川	徹也	
大学図書館職員長期研修について……………	石塚	英弘	2 (2)
実習演習施設について……………	外村	弘臣	2 (3)
東南アジアからのマイクロ研修員たち……………	川崎	誠	2 (4)
笠木文庫目録の刊行について……………	黒岩	高明	3 (1)
図書館統計……………	横山	敏秋	3 (2)
コンピュータシステムの一部変更について……………	川崎	誠	3 (3)
第一回国立大学図書館協議会シンポジウムについて……………	小野	実	3 (4)
附属図書館のAV資料 (1)……………	加藤	信哉	4 (1)
附属図書館のAV資料 (2)……………	白石	光雄	4 (3)
一年間を振り返ってみて……………	白石	光雄	4 (4)
平成元年度附属図書館購入外国雑誌 —図書館情報学関係—……………	増子	雅幸	5 (2)
電子計算機システムの更新について……………	平岡	博	5 (4)

資料選定委員会の活動について……………	根 本 彰	6 (1)
保存書庫への資の移動について……………	平 岡 博	6 (2)
附属図書館目録の検索について……………	加 藤 信 哉	6 (3)
附属図書館のマイクロ資料……………	平 岡 博	6 (4)
公開図書室の1365日……………	薬 袋 秀 樹	7 (1)
平成2年度附属図書館統計……………	福 島 繁 實	7 (2)
資料でみる公開図書室……………	佐々木 とき子	7 (3)
新しいオンライン目録		
—ULIS-MARC から ULIS OPAC へ……………	加 藤 信 哉	7 (4)
図書館情報学：第三の波		
—総合情報処理センターの発足……………	田 畑 孝 一	7 (4)
新しい図書館業務システムについて……………	加 藤 信 哉	8 (1)
平成3年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	8 (2)
附属図書館のCD-ROM資料……………	大 澤 類 里 佐	8 (3)
附属図書館の最近の課題について……………	湯 本 一 義	8 (4)
平成4年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	9 (2)
購入雑誌の選定と購入について……………	須 永 和 之	9 (4)
雑誌の配架と製本について……………	大 澤 類 里 佐	10 (1)
平成5年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	10 (2)
ILLシステムについて……………	大 澤 類 里 佐	10 (3)
	下 坂 明 子	
「学術雑誌目次速報データベース」について……………	情 報 資 料 係	11 (1)
平成6年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	11 (2)
開放型マルチメディア電子キャンパス・プロジェクト ……	川 瀬 正 幸	11 (3)
—電子図書館システムと教育システムとの連携—		
図書館資料の配架……………	情 報 奉 仕 係	11 (4)
附属図書館のWWWホームページの公開について……………	図 書 館 情 報 課	12 (1)
	WWW ホームページ WG	
平成7年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	12 (2)
総合情報処理センター新棟とATMキャンパス		
ネットワークについて……………	総 合 情 報 処 理 セ ン タ ー	12 (3)
雑誌の利用：配架と保存を中心に……………	情 報 奉 仕 係	12 (4)
WWW版OPACの公開について……………	図 書 館 情 報 課	13 (1)
平成8年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	13 (2)
ビデオ資料……………	情 報 奉 仕 係	13 (3)
WWW版OPACの報告……………	情 報 奉 仕 係	13 (4)
新図書館システムについて……………	図 書 館 情 報 課	14 (1)
平成9年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	14 (2)
NICHIGAI/WEB サービスの利用について ……	情 報 奉 仕 係	14 (3)
WWW版OPACの使い方について……………	情 報 奉 仕 係	14 (4)
デジタル図書館のメタデータについて……………	平 岡 博	15 (1)
デジタル図書館のサービスについて……………	平 岡 博	15 (2)
平成10年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	15 (2)
SCSによる長期研修講義の提供……………	横 山 敏 秋	15 (4)
Knowledge Worker の導入 ……	横 山 敏 秋	16 (1)
平成11年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	16 (2)
Enjoy JOIS の利用について ……	丸 山 輝 芳	16 (3)
NICHIGAI/WEB サービスの利用について ……	丸 山 輝 芳	16 (4)
平成13年度購入雑誌について……………	図 書 館 情 報 課	17 (1)
平成12年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	17 (2)
附属図書館の改修整備について……………	丸 山 輝 芳	17 (3)
附属図書館デジタルメディア部門について……………	山 本 淳 一	17 (4)
電子ジャーナルへの取り組み……………	図 書 館 情 報 課	18 (1)
平成13年度附属図書館統計……………	図 書 館 情 報 課	18 (2)
資 料 紹 介		
数学の本20選……………	村 田 健 郎	1 (1)
昭和59年度大型コレクション 「印刷・製本・		
出版関係コレクション 1764—1982……………	藤 野 幸 雄	1 (2)
ドイツ語辞典抄……………	小野寺 和 夫	1 (3)
学問史へのいざない……………	小 野 泰 博	1 (4)
法学入門……………	稗 貫 俊 文	2 (1)
昭和60年度大型コレクション 「百万塔陀羅尼」 ……	高 橋 重 臣	2 (2)
Max Weber に関する諸文献の紹介 ……	大 庭 治 夫	2 (3)
シェイクスピア読者のための本5選……………	藤 田 玲 子	2 (4)
企業間競争と情報システム……………	藤 原 祥 三	3 (1)
昭和60年度大型コレクション 「図書館情報学		
関係学位論文集成 (1981—85) ……	藤 野 幸 雄	3 (2)

建築の本10選	植松貞夫	3 (3)
近世期の対外文化交流・貿易史関係文献		
—1986年—	太田勝也	3 (4)
出版活動をめぐる資料について	矢作美	4 (1)
物理学とその周辺	和光信也	4 (2)
学生生活を快適に過ごすために	上加月英樹	4 (3)
音楽図書館	加藤信哉	4 (4)
スポーツ科学に関する2次資料	畑孝幸	5 (1)
国語辞典について	酒井二肇	5 (2)
経済統計データについて	田村秀彦	5 (3)
プログラムの本	長谷川秀彦	5 (4)
認知科学	平賀譲	6 (1)
フランス語辞典について	野村二郎	6 (2)
著作権の専門資料—その1—	大瀬戸豪志	6 (3)
井上哲次郎他著「哲学字彙」	星川啓慈	6 (4)
英語の辞書について	藤田玲子	7 (1)
語史と辞書史	山田貞雄	7 (2)
The Horn Book Magazine	赤星隆子	7 (3)
デスクトップパブリッシング	阪口哲男	7 (4)
源氏香と確率	石井啓豊	8 (1)
著作権の専門資料—その2—	大瀬戸豪志	8 (2)
中国語辞書案内	大塚秀明	8 (3)
オブジェクト指向	増永良文	8 (4)
研究開発のヒューマンドキュメント	磯谷順	9 (1)
エイズ	広瀬賢	9 (2)
図書館情報学関係学位論文集成	板井賢	9 (3)
NTIS研究レポート (マイクロフィッシュ)		
： 図書館情報学篇	大澤類里佐	9 (4)
完璧な書誌は可能か —ある回想—	黒古一夫	10 (1)
手引書と著作権法	原秀成	10 (2)
工具書	村越喜代美	10 (3)
リスク・レクリエーションの参加動機		
—人はなぜ山に登るのか—	坂本裕昭	10 (4)
公共図書館関係の本 10選	葉袋秀樹	11 (1)
遺伝的アルゴリズム：入門書、専門書、その他	鎮目浩輔	11 (2)
こころのセルフヘルプ	上月英樹	11 (3)
資料はなにを愛するか	吉野修	11 (4)
人間の情報処理メカニズムを学ぶために	中山伸一	12 (1)
解釈学とは何か	遠藤龍二	12 (2)
「機械振動学」とは何か	松浦克昌	12 (3)
図書館情報学分野の基本的な和雑誌	松井幸子	12 (4)
文献探索法に関する図書	大庭一郎	13 (1)
「気の世界」入門書あれこれ	遠藤卓郎	13 (2)
ドイツ読者研究の基礎資料	佐藤隆司	13 (3)
中国の地方志	松本浩一	13 (4)
データベースの選択	岩澤まり	14 (2)
コンパイラおよびコンパイラコンパイラに関する本	中山井央	14 (3)
おかん婆さん？女性人名辞典について	山本順一	14 (4)
デジタル図書館に関する資料	宇陀則彦	15 (2)
新聞	後藤嘉宏	15 (4)
初心者向け「筑波の道」案内	綿坂豊昭	16 (1)
「図書館・情報メディア双書」について	黒古一夫	16 (2)
高等教育学入門	溝上智恵子	16 (3)
「公害行政法講座」	山本順一	16 (4)
クールボワン『図説フランス版画史』	寺田光孝	17 (1)
明治期の子どもの本	赤星隆子	17 (2)
往来物について	綿坂豊昭	17 (3)
最近出版された Visual Basic に関する書籍について	水落憲和	17 (4)
「長崎旧記」	太田勝也	18 (1)
パンクック『系統的百科全書』	寺田光孝	18 (2)
ターミノロジー		
ターミノロジー	松村多美子	1 (1)
データベース	山本毅雄	1 (2)
1次資料、2次資料、3次資料	野添篤毅	1 (3)
人工知能	伊藤哲郎	1 (4)
参考図書	佐々木敏雄	2 (1)
オートマトン	長谷部紀元	2 (2)

ビブリオグラフィ	根 本	宣	彰	2 (3)
コンコーダンス	桜 井	宣	隆	2 (4)
認知科学	平 賀	信	讓	3 (1)
サイテーション・インデックス	緑 川	憲	之	3 (2)
辞典・字典・事典	酒 井	重	二	3 (3)
ソフトウェア・ハードウェア・ファームウェア	枚 本	高	雄	3 (4)
逐次刊行物	黒 岩	幸	明	4 (1)
典拠作業	松 井	秀	子	4 (2)
インデックス	薬 塚	英	樹	4 (3)
機械翻訳	石 山	毅	弘	4 (4)
CD-ROM とその周辺 (光ディスク記録媒体)	山 本	孝	雄	5 (1)
O S I	田 畑	良	一	5 (2)
マルチメディアデータベース	増 永	修	文	5 (3)
数式処理	森 継	伸	一	5 (4)
情報化学	中 山	谷	元	6 (1)
LAN	長 谷	部	一	6 (2)
ファジ理論	谷 口	紀	元	6 (3)
エキスパートシステム	枚 本	重	雄	6 (4)
自然言語処理	石 川	徹	也	7 (1)
漢籍目録の用語	和 泉		新	7 (2)
漢籍目録の用語II	和 泉		新	7 (3)
漢籍目録の用語III	和 泉		新	7 (4)
ハイパーテキスト, ハイパーメディア	石 塚	英	弘	8 (1)
電子図書館	松 村	多	美	8 (2)
オンライン目録	松 井	幸	子	8 (3)
国民の政府資料に対するアクセス権	山 本	順	一	8 (4)
歴史と史料	太 田	勝	也	9 (1)
グレイ・リタレチャー (灰色文献)	根 本		彰	9 (2)
広域ネットワーク	藤 田	岳	久	9 (3)
知的財産権	大瀬戸	豪	志	9 (4)
官庁統計	岸 田	和	明	10 (1)
レビュー	武者小路	澄	子	10 (2)
音楽情報処理	平 賀	重	讓	10 (3)
デジタル図書館	枚 本	重	雄	11 (1)
フラクタル	松 本		紳	11 (2)
イギリス政府刊行物の一側面	藤 野	幸	雄	11 (3)
A T M	阪 口	哲	男	11 (4)
用語の多義性—経済用語の若干の事例—	大 庭	治	夫	12 (1)
G I S	歳 森		敦	12 (2)
Grand Challenges and National Challenges	長谷川	秀	彦	12 (3)
メタデータ	永 田	治	樹	12 (4)
ニューメディアとマルチメディア	常 磐		繁	13 (1)
量子計算機	鎮 目	浩	輔	13 (2)
資料保存	原 川	淳	之	13 (3)
GPS	川 瀬	正	幸	13 (4)
ソシオ・メディア論	吉 田	右	子	14 (1)
光ファイバー	磯 谷	順	一	14 (2)
心的辞書	王 晋		民	14 (3)
XML:拡張可能なマーク付け言語	石 塚	英	弘	14 (4)
メタデータ —Dublin Core と Resource Description Framework	枚 本	重	雄	15 (1)
サーチエンジン	三 波	千	穂	15 (4)
PC—UNIX	大 澤	文	人	16 (1)
情報資源識別子	谷 口	祥	一	16 (2)
X S L (Extensible Stylesheet Language)	永 森	光	晴	16 (3)
多言語情報検索	石 川	徹	也	16 (4)
ビブリオメトリックス, インフォメトリックス,				
サイエントメトリックス	小野寺	夏	生	17 (1)
サブジェクトゲートウェイ	緑 川	信	之	17 (2)
コンピュータグラフィックスと物理	時 井	真	紀	17 (3)
TF-IDF	松 村		敦	17 (4)
フラッシュメモリ	磯 谷	順	一	18 (1)
文字認識装置について	小 高	和	己	18 (2)
エ ッ セ イ				
一冊の本のタイトルから	酒 井	憲	二	1 (1)
漢字データベースの開発をめぐる	星 野		聡	1 (2)
図書館員と学識	高 橋	重	臣	1 (3)

情報学は雄カマキリである……………	徳山五郎	1 (4)
連関、推論、そして情感……………	田畑孝	2 (1)
駅・落語・抄録……………	木澤誠	2 (2)
果物との出会い……………	城倉英人	2 (3)
アナル学派と図書館文化史……………	寺田光孝	2 (4)
C I & E 図書館のことなど……………	藤川正信	3 (1)
フランクフルトの大学図書館……………	我田広之	3 (2)
《国立古文書学校》から《国立情報図書館学校》へ……………	野村二郎	3 (3)
関門海峡とある市立図書館長……………	志村尚夫	3 (4)
専門図書館—利用者の立場から—……………	関口礼子	4 (1)
Refuge in the Library ……………	Sharon Domier	4 (2)
図書館と私……………	山本順一	4 (3)
ケンブリッジ・図書館・ヴィトゲンシュタイン……………	星川啓慈	4 (4)
本をめぐる環境……………	山田高子	4 (4)
Thought on Books and Reading Habits in Japan		
…………… Clive Stuartt Langham		5 (1)
「世界最大の書店」……………	根本彰	5 (2)
ろくと目録……………	松本浩一	5 (3)
ある実験屋の情報管理—装置製作を例にして……………	磯谷順一	5 (4)
附属図書館を利用して……………	山崎直子	6 (1)
アルバイトの中で考えたこと……………	大野亜希世	6 (3)
アルバイトの中で考えたこと……………	川西裕子	6 (4)
アメリカ議会図書館模型製作記……………	大道博史	7 (1)
図書館員よ、おしゃべりになろう！……………	清水悦子	7 (2)
小児病棟のおはなし会……………	牛沢典子	
	松浦菜緒子	8 (2)
カウンター日記……………	鳥山幸子	8 (3)
フィンランドの図書館……………	畑孝幸	9 (1)
バイト生雑感……………	馬場真紀子	9 (2)
図書館バイトについて……………	鹿内栄治	9 (3)
香港の図書館概観—図情大に学ぶ一人として……………	徐文光	9 (4)
本を枕に阿呆狸主夢（アフォリズム）……………	吉田政幸	10 (1)
ドルン演出の「ファウスト」……………	都築正己	10 (2)
貯水池の下の図書館……………	永田治樹	10 (3)
考える図書館…………… バーバリッチ・フランク		10 (4)
筑波山中で犬にからまれた話……………	石井啓豊	11 (1)
盗人にも三分の利……………	吉田政幸	11 (2)
その町の冬……………	三波千穂美	11 (3)
混ぜればゴミ 分ければ資料……………	後藤嘉宏	11 (4)
図書館オタクとパソコン小僧……………	藤田岳久	12 (1)
システム三分の計……………	宇陀則彦	12 (2)
航星日誌宇宙暦1996.7.30 ……………	緑川信之	12 (3)
晴晴耕耕・雨読……………	椎名健	12 (4)
茜色の映える本、詩を語る博士論文……………	武者小路澄子	13 (1)
チョーケン……………	横山敏秋	13 (2)
ものを観る……………	小高和己	13 (3)
「おたくはと聞かれたように」……………	綿坂豊昭	13 (4)
R I S C — L i n z 紹介……………	森継修一	14 (1)
ホームページと王 義之……………	村越貴代美	14 (2)
茶会……………	横山幹子	14 (3)
トレール探検……………	永森光晴	14 (4)
夢って何ですか……………	平久江祐司	15 (1)
雉も鳴かずば……………	歳森順一	15 (2)
図書館は“大学のハート”である……………	山本順一	15 (4)
ローマでの研究生生活……………	藤井敦	16 (1)
カナダに見る I T 革命と図書館……………	植松貞夫	16 (2)
小露玲と話すこと……………	武者小路澄子	16 (3)
ある図書館長のこと……………	葉袋秀樹	16 (4)
好きな言葉などについて……………	上月英樹	17 (1)
沖縄の七不思議……………	栗山正光	17 (2)
不思議の国ミシガンの白昼夢……………	坂本昭裕	17 (3)
One American Perspective of the Current Crisis……………	Oshima Karen	17 (4)
虜……………	粕川昌子	18 (1)
図書館訪問と折り紙……………	大庭一郎	18 (2)

附属図書館日誌

Chronological Notes

- 6. 7 資料選定専門委員会開催
(平成14年度第2回)
- 6.11 デジタル図書館専門委員会開催
(平成14年度第1回)
- 6.20 附属図書館運営委員会開催
(平成14年度第3回)
- 6.26-27 第49回国立大学図書館協議会総会(於
鳥取県立県民文化会館 附属図書館長、
図書館情報課長出席)
- 7. 8-26 平成14年度大学図書館職員長期研修
開催
- 7.29-8.23 平成14年度学校図書館司書教諭講習
開講
- 8. 1-29 東京成徳短期大学図書館実務研修

編集後記：

今後、図書館情報学のアイデンティティを問われることがますます多くなるだろう。そこで、最終号では、図書館情報学という学問の性質を改めて確認するとともに、今後の進むべき方向を探るために「図書館情報学の新たな方向」というテーマで特集を組んだ。なお、「新たな方向」は一つではなく、図書館情報学は全方位、どの方向にでも進めるという意味を込めた。

図書館情報学は何をする学問なのかを外部の人に説明するのは難しい。ほとんどの人が図書館司書を養成するための学問だと思っているだろう。それは間違っていないが、非常に偏った認識である。司書養成の文脈だけで図書館情報学を語ると、学問として衰退し、変革の波に飲み込まれる可能性がある。特に今の“図書館”という名前では呼ばれている組織や制度を前提とした場合はなおさらである。

他の学問領域と比較して図書館情報学がわかりにくい原因は、理論がないこと、対象が曖昧なこと、方法論に共通の基盤がないことである。特に、方法論に関してはアプローチの違いが顕著であり、とて

も同じ学問とは思えず、結果としてばらばらな印象を与える。しかし、それだけで図書館情報学自身がばらばらだと思えるのは早計である。確かに一つ一つのアプローチを見る限りではそう見えるが、複数のアプローチを重ね合わせたとき、確固たるコアが見える。その中心にあるのは対象としての「データ」である。データを純粋なオブジェクトとして、社会学や工学などあらゆる側面から一つの枠組みとして研究する学問は図書館情報学だけである。そして、枠組みとしての役割を担うのが情報基盤としての「知の社会的装置」である。

図書館情報学から見れば、最終的に知の社会的装置を通じて意味化されたデータを人々に提供できれば方法は何でもよい。方法を限定することは逆に図書館情報学の進歩を阻害する。時代に応じて新しい道具や新しい方法を貪欲に取り入れることに図書館情報学の真髓がある。例えば、今はたまたまコンピュータが便利だから使っているが、次の時代でもっと便利な道具が出てくれば捨てればよい。

常にアンテナを張って情報を収集し、必要ならこれまでの方法と道具を捨てる大胆さと、新しい道具を取り込む柔軟性を持った人間がライブラリアンと呼ばれる。残念ながら、今の司書課程は既存の道具や方法に固執するばかりで、ライブラリアンの育成ができていない。

図書館情報学がこの先、資格取得のための司書養成という限定された位置づけになって退化するか、新しく知の総合科学として再生するかはわからないが、知の総合科学という位置づけで発展するとき、新しい形の知の社会的装置が誕生するだろう。その組織はもしかしたら“図書館”という名前では呼ばれないかもしれないが、これまで続けてきた「図書館」という概念は継承される。無論そのとき、この学問も“図書館情報学”という名前ではない。

哲学、文学、認知科学、社会学、理学、工学等それぞれのアプローチは、新しい知の社会的装置を実現するために全て必要なアプローチである。一つ一つのアプローチからでは見えず、集合体になって初めてアイデンティティを確立する特殊な学問、それが図書館情報学である。そのことをこの特集号で証明した。
(宇陀則彦)

附属図書館ホームページ (URL <http://www.ulis.ac.jp/library/>)

編集委員会：宇陀則彦、藤田玲子、川久保美津江、嶋田君枝、廣田直美、金藤伴成

図書館情報大学附属図書館報 Vol. 18 No. 3/4 2002年8月25日発行 (季刊)

編集・発行 〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 図書館情報大学附属図書館 ☎0298-59-1210

Library, University of Library and Information Science/1-2 Kasuga, Tsukuba, Ibaraki 305-8550, Japan